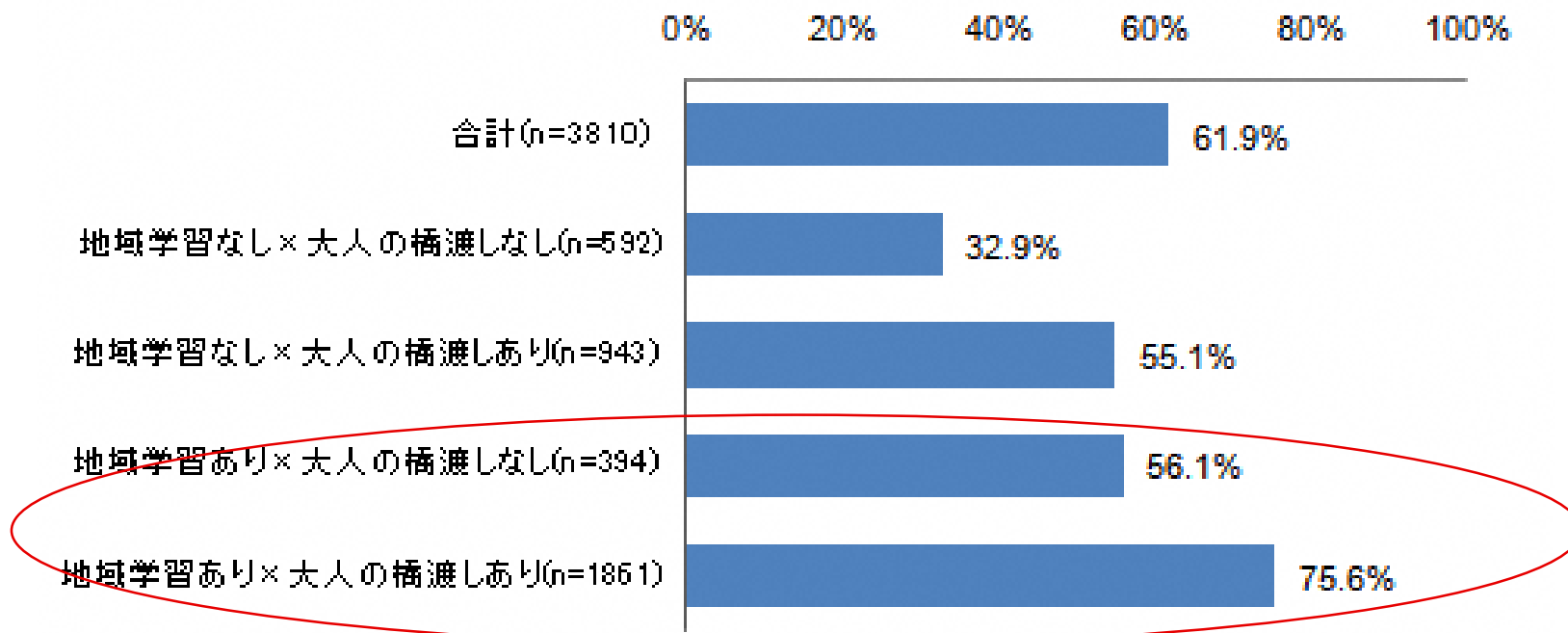


# ① 「何を学ぶか」だけではなく、「どのような環境で学ぶか」との相乗効果が重要

- 新学習指導要領で求められる「主体的、対話的で深い学び」は、それを支える豊かな学習環境があることで、その教育効果が大きく高まることが示唆される。例えば下図のように、地域の課題解決のための学習を行っていても、「興味を持ったことに橋渡ししてくれる大人」がいなければ、その教育効果は限定される。逆に、その両者が揃っていれば、学習効果は飛躍的に高まることが示唆される。

課題探究学習の頻度と、学びの土壌、生徒の成長の関係性



注1)「地域学習」は、「地域の課題の解決方法について考える」学習機会について、「よくある」「時々ある」と回答した者を「あり」、「あまりない」「ほとんどない」と回答した者を「なし」に分類。

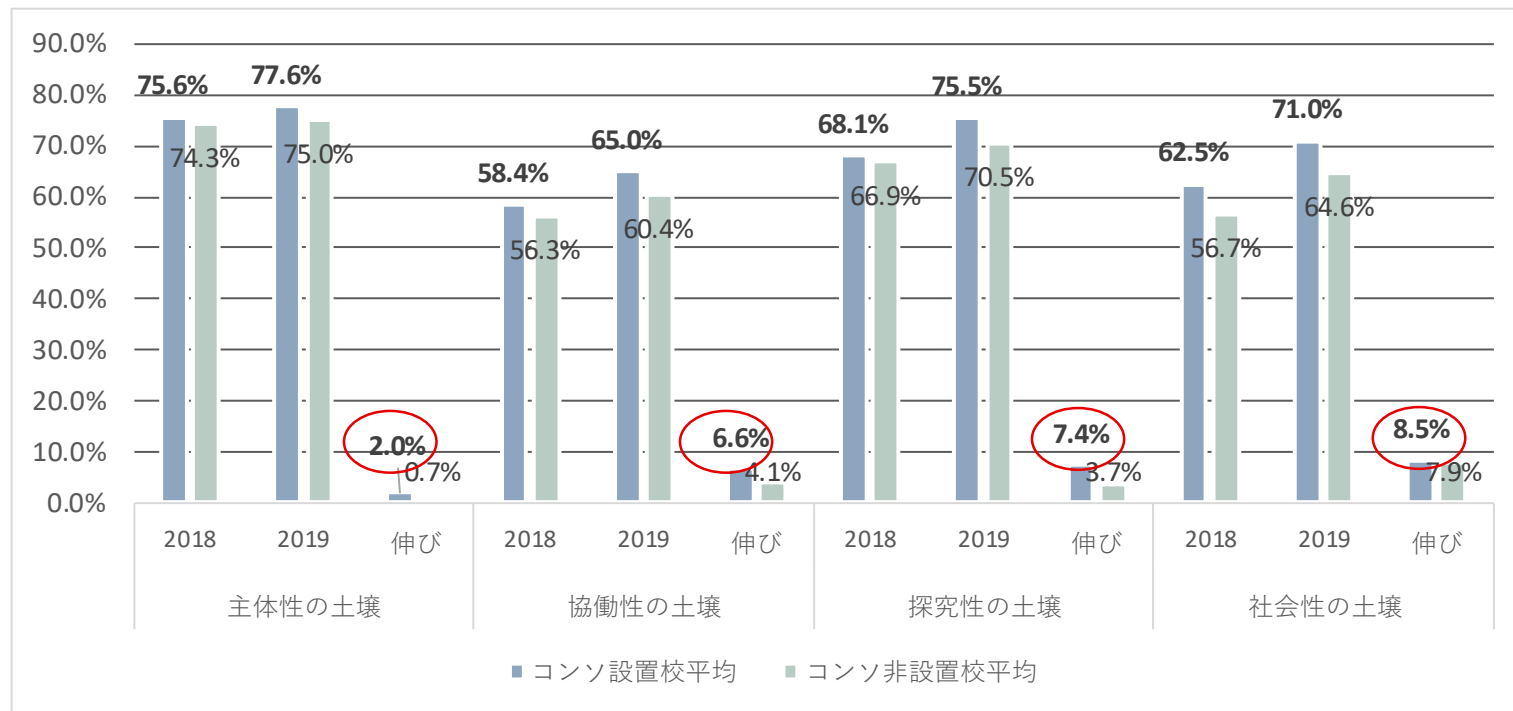
注2)「大人の橋渡し」は、「**地域の人や課題など、興味を持ったことに対してすぐに橋渡ししてくれる大人がいる**」について、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した者を「あり」、「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」と回答した者を「なし」に分類。

注3)グラフの%は、「地域をよりよくするため、地域における問題に関わりたい」に、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答した者の割合。出所)島根県(2019)「高校や地域の学習環境アンケート」における高校魅力化実践校(16校)の調査結果より作成

## ② 学びの土壌を育てるのは、多様な大人の協働・連携か

- 島根県での調査によると、「学びの土壌」を2カ年計測した結果、コンソーシアムを設置して地域との協働を推進していた高校(コンソ設置校)において、その経年による伸びが高くなっている。

コンソーシアム設置校／非設置校の比較(学びの土壌の値とその変化)



出所)島根県(2018、2019)「高校や地域の学習環境アンケート」における高校魅力化校(16校)の調査結果より作成

注1)グラフの値は、各調査年度、調査項目(複数設問から構成)における各学校の肯定的回答割合平均を、分析軸ごとにさらに平均した値。

注2)2年生の結果のみを対象としているのは以下の理由による。

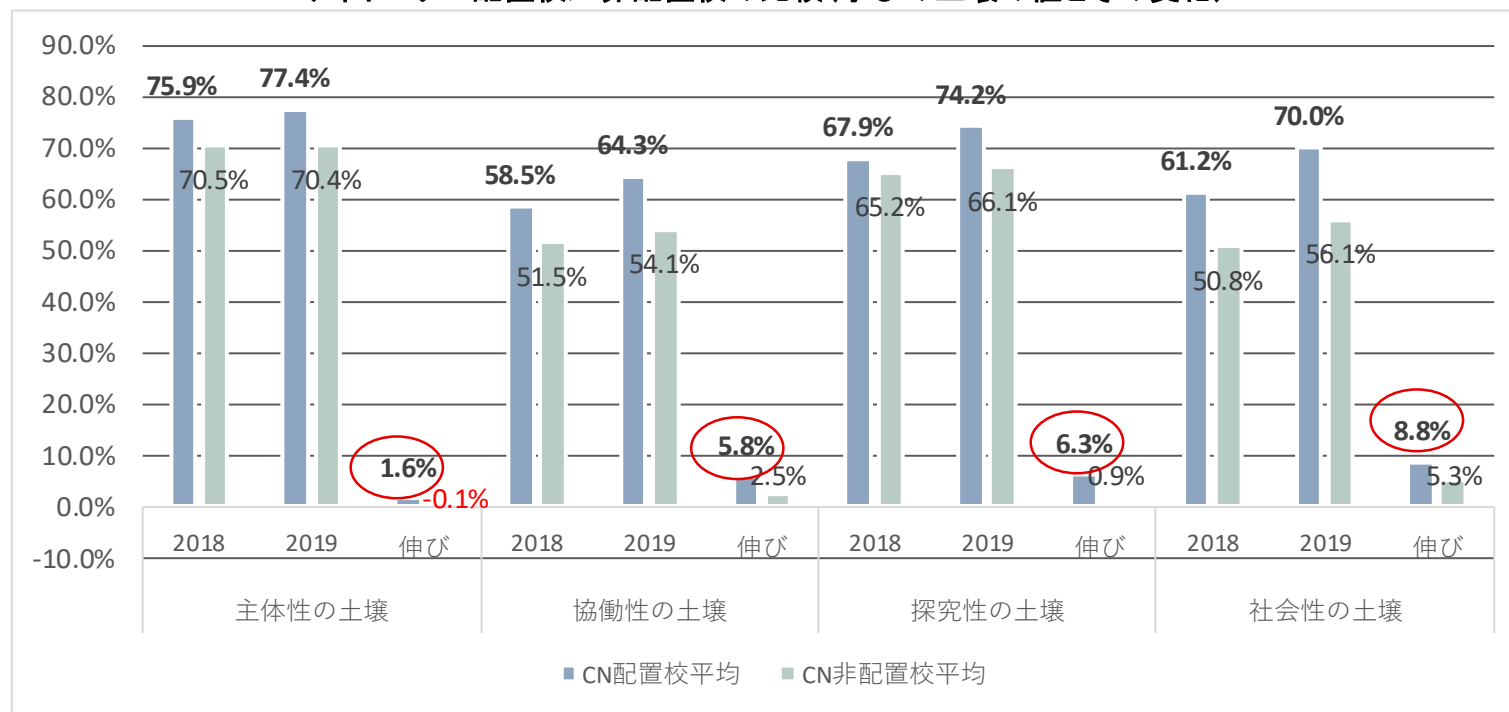
- ・学習機会に関わる設問は、高校1年生については「中学時代」の機会について尋ねているため、高校の学習機会について把握するためには2年生以上の回答を用いる必要がある。

- ・年度間の変化を見るために、2018年、2019年に継続して在学している2年生の回答を用いるのが最適と判断している。

## ② 学びの土壌を育てるのは、多様な大人の協働・連携か

- 島根県での調査によると、「学びの土壌」を2カ年計測した結果、学校と地域をつなぐコーディネーターを高校に配置して地域との協働を推進していた高校(CN配置校)において、その経年による伸びが高くなっている。

コーディネーター配置校／非配置校の比較(学びの土壌の値とその変化)



出所) 島根県(2018、2019)「高校や地域の学習環境アンケート」における高校魅力化校(16校)の調査結果より作成

注1) グラフの値は、各調査年度、調査項目(複数設問から構成)における各学校の肯定的回答割合平均を、分析軸ごとにさらに平均した値。

注2) 2年生の結果のみを対象としているのは以下の理由による。

- ・学習機会に関わる設問は、高校1年生については「中学時代」の機会について尋ねているため、高校の学習機会について把握するためには2年生以上の回答を用いる必要がある。

- ・年度間の変化を見るために、2018年、2019年に継続して在学している2年生の回答を用いるのが最適と判断している。

## 参考：本資料で扱ったデータ

- 2018年度、2019年度の2カ年にわたり、島根県内の県立高校を対象に「高校魅力化評価システム」に基づくアンケート調査を実施。調査概要は以下の通り。

2018年度調査		2019年度調査	
調査対象	島根県内の魅力化推進校 16校	島根県内の県立高校 40校 (定時制高校、養護学校含む。通信制課程除く)	
調査方法	アンケート調査票(紙媒体)による配布、回収	Web調査またはアンケート調査票(紙媒体)による配布、回収	
回収	学校数: 16校 生徒数: 4,104人 大人数: 562人(うち教員424人)	学校数: 39校 生徒数: 11,609人 大人数: 1,329人(うち教員1,307人)	
留意事項	両調査で一部設問の入れ替えや表現の修正を行っている点に留意。		

- 島根県調査における分類として設けた軸は以下の通り。

- **コンソーシアム設置校(広義)**

- ・県に申請してコンソーシアムを設置している高校及び、島根県の「コンソーシアム先導モデル構築事業」の対象校を加えた7校。

- **コーディネーター配置校**

- ・令和元年度6月時点で、学校付きのコーディネーターを配置している高校。(13校)

---

### III. 改めて、学びの土壌とは何か

# 学びの土壌とは



生徒や大人を取り巻く「学ぶ環境」



- ・何を学べるか
- ・どのように学べるか
- ・誰と、どのような環境で学べるか

< 島根県海士町での聞き取り調査から実際に得られた、生徒の成長の背景・要因 >



- ・色々な人が行動しているのを間近で見て感化された
- ・日常生活の中で多くの人と触れ合う機会があった
- ・自分は自分で良くて、他人の夢や行動と同じように  
しなくても良いと言ってくれたスタッフの人
- ・本気なら全力で応援してくれる大人・地域の人がいる
- ・色々なことをしている人を見てチャレンジすることへのハードルが低くなった
- ・先生との面談で夢を実現するためにどうすれば良いか明確になった
- ・OBが島に連れ出してくれたり、地域の人にあわせてくれたり、  
手伝いの楽しさを経験させてくれる

生徒の学びを深める学習環境に必要な4つの要素を抽出

安心・安全の  
土壌

多様性の  
土壌

対話の土壌


開かれた  
土壌

学びの土壌	構成要素	構成要素のイメージ
挑戦の連鎖を生む 安心・安全の土壌	失敗が許容される関係性	頑張る人を応援する雰囲気があるか
	挑戦が肯定・応援される関係性	当事者意識を持ち挑戦する人が周囲にいるか
	挑戦する人・憧れの存在	尊敬する人、憧れる人が周囲にいるか
	巻き込まれ、巻き込む機会	周囲の人の挑戦に関わる機会があるか
協働を生む 多様性の土壌	違いが尊重される関係性	人と違うことが尊重される雰囲気があるか
	個性が尊重される関係性	ありのままの自分が尊重される雰囲気があるか
	多様性の存在	様々な意見や価値観を持つ人との関りがあるか
	多様な人と協働する機会	立場や役割を超えての協働がみられるか
問う・問われる 対話の土壌	本音で対話できる関係性	気兼ねなく本音を発言できる雰囲気があるか
	相談できる仲間の存在	一緒に考えてくれる仲間がいるか
	支援者としての大人が存在	大人は指導者ではなく支援者となっているか
	問う・問われる機会	振り返りの機会があるか
地域や社会に 開かれた土壌	地域から受容されている関係性	地域は生徒を積極的に受け入れてくれるか
	媒介者の存在	地域の資源や課題に繋いでくれる人はいるか
	地域資源・課題に関わる機会	地域社会と関わり合う機会があるか
	越境・相対化の機会	外の視点から自地域を考える機会があるか



# 学びの土壌は誰が創る？

< 島根県海士町での聞き取り調査から実際に得られた、**大人**の成長の背景・要因 >

- 
- ・生徒、教職員に語るに当たり、率先垂範を貫く必要があると考えた
  - ・自分自身が学び続け、魅力的であり続けなければ生徒に接する資格はないと思うようになっていき、いい意味で緊張感を持つようになった
  - ・日々、寮で主体的に活動している生徒たちを見て、寮でできて学校でできないことがあるのは、生徒たちだけでなく先生側にも責任があるのではないかと感じるようになった
  - ・指導するスタッフが価値観を明らかにしたり、将来自分のやりたいことを言語化できたりしている状態であればこそ、生徒にも指導することができる
  - ・何のためにするのか、という目的意識を常に点検するようになった
  - ・以前以上に学校目標、育てたい力を自己の実践の中で考えるようになった

生徒の学びを深める大人のあり方 4つの要素を抽出

大人の  
主体性

大人の  
協働性

大人の  
探究性

大人の  
社会性

# 学びの土壌は誰が創る？

学びの土壌	構成要素
挑戦の連鎖を生む <b>安心・安全の土壌</b>	失敗が許容される関係性
	挑戦が肯定・応援される関係性
	挑戦する人・憧れの存在
	巻き込まれ、巻き込む機会
協働を生む <b>多様性の土壌</b>	違いが尊重される関係性
	個性が尊重される関係性
	多様性の存在
	多様な人と協働する機会
問う・問われる <b>対話の土壌</b>	本音で対話できる関係性
	相談できる仲間の存在
	支援者としての大人の存在
	問う・問われる機会
地域や社会に <b>開かれた土壌</b>	地域から受容されている関係性
	媒介者の存在
	地域資源・課題に関わる機会
	越境・相対化の機会

率先垂範

大人のあり方	構成要素	構成要素のイメージ
<b>大人の主体性</b>	失敗の許容	・失敗を恐れずに挑戦することができる
	挑戦の肯定・応援	・挑戦する人に手を差し伸べることができる
	挑戦の体現	・目標や当事者意識を持って挑戦することができる
	巻き込まれ、巻き込む経験	・誰かの挑戦に対して関わる機会を持つようとしている ・自身の挑戦に、積極的に周囲を巻き込もうとしている
<b>大人の協働性</b>	違いの尊重	・意見の相違について気軽に話し合うことができる
	個性の尊重	・ありのままの個人を尊重することができる
	多様性の体現	・固定的な役割や立場を超えた人との交流ができている ・意見や価値観が異なる人との交流ができている
	多様な人との協働の経験	・固定的な役割や立場を超えて協働ができている ・意見や価値観が異なる人と協働ができている
<b>大人の探究性</b>	本音の対話	・本音を気兼ねなく発言することができる
	相談できる仲間の存在	・未来のありたい姿や実現したい状態を話し合える人がいる
	支援者としての大人の体現	・生徒に対して、答えを教えるのではなく、相手の話や意見を引き出す対話ができている
	問う・問われる経験	・自らの行動を振り返り、見直す(内省する)ことができる ・互いに問いかけあい、探究を深めていくことができる
<b>大人の社会性</b>	地域の受容感	・地域全体で子どもを育てていくという意識ができている
	媒介者の体現	・生徒の関心に合わせて、現場や人を紹介することができる
	地域資源・課題に関わる経験	・現場に関わり、地域の人や課題などに直に触れることができる
	越境・相対化の経験	・自分の暮らす地域を、外からの視点で振り返る経験ができている

## 「学びの土壌」(学習環境)に着目することで得られる示唆

- ✓ 「何を学ぶか？」と同等に、「誰と学ぶか？」や「どのような環境で学ぶか？」が生徒にとって非常に重要。
- ✓ 授業や課外活動などという方法を通して、大人が生徒にどう関われるか？どういった学習環境を用意できるか？が重要
- ✓ 学習活動と学びの土壌の組み合わせから、目指したい学校のあり方を、個々人の行動レベルまで落とし込むことができる

## 求められるカリキュラムマネジメント

育てたい生徒像・伴走する「大人のあり方」の明確化

授業づくり

何を学べるか  
どのように学べるか

明示的なカリキュラム

土壌づくり

誰と学べるか  
どのような環境で学べるか

隠れた（非明示的な）カリキュラム

両者を統合するコーディネート機能・協働の仕組み

## 学びの土壌を、いかにして学校の仕組みとして落とし込むか

- ✓ 事例①：A高校では「学びの土壌」の考え方をベースに、生徒に「自身が成長を実感したとき、きっかけ」を探究テーマにして授業を実施。学びの土壌×メタ認知による振り返りを通して、生徒自身も学習環境づくりの主体として巻き込む仕掛け。
- ✓ 事例②：B高校では高校魅力化評価システムの「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の要素から、高校で育てたい生徒像を明文化。それと合わせて、「学びの土壌」の考え方をもとに、「（育てたい生徒像を実現するための）大人の行動指針」を合わせて明文化。生徒と大人が共に学び合うためのグランドデザインを策定している。

### ここまでの議論から生まれる、本検討会で深めたい私の「問い」

- ✓ 市立学校の継続的な「魅力」創出には、学習環境の豊穡化、すなわち（教職員に限らない）生徒を取りまく大人の魅力化が必要。異動等による人材の流動性が低い現行の仕組みも踏まえると、いかに「大人の学びを止めない」仕組み・仕掛けを、生徒の学びの保障との両輪で考えることができるだろうか？
- ✓ また、大人も共に学び、成長する（＝学習環境の豊穡化）学校であること自体を、市立高校の魅力として外部に効果的に訴求できないか？